

都医師会・尾崎会長、新型コロナ定期接種伸び悩みに理解求める「十分に伝わっていない」

11/12 東京ヘッドライン



東京都医師会は11月12日、都内で定例記者会見を行い、10月から始まった新型コロナウイルスワクチンの定期接種の伸び悩みについて言及した。

尾崎治夫会長は、冒頭で「皆さんもお聞き及びかと思うが、大分ワクチンの接種率が悪い」と切り出し「これまで（～2024年4月1日）に7回ほど受けてきたわけだが、それに比べても非常に悪い。なぜ悪いかというと、ひとつは10月から65歳以上の方の定期接種が始まっていることが十分に伝わっていない」と言及。

「もうひとつは“6～7回ワクチンを打ったからもう大丈夫じゃないか”という高齢者の方もかなりいらっしゃる」といい、その理由を「インフルエンザのワクチンはどうしているの」と聞くと“毎年打っている”“もう十数回打っている”とおっしゃる。なぜ打つのかというと、抗体が少なくなるから今年も打たなきゃいけないことは分かっている。ところが“コロナに関しても同じようなことなんですよ”と言ってもまだ理解されていない」と明かした。

ワクチン接種の意義を「コロナワクチンも半年経つと抗体価が下がってきて、効力が薄れることをお伝えして少なくとも今年は打っていただきたいという話をする。先日、報道があったけれどもコロナが5類に移行してからの1年間（2023年5月～2024年4月）で、3万2576人の方が亡くなっている。これはインフルエンザの約15倍の死亡率で、亡くなった方の約97%が65歳以上であることが分かっている。いかに冬の流行に備え、特に65歳以上の方がコロナワクチンを打っておくことが非常に大切」と尾崎会長。

さらに、報道陣に対し「これも皆さんによく伝わっていないことだが、従来のmRNAワクチンがファイザーとモデルナの2種類、新たな第一三共のmRNAワクチンが1種類、武田薬品のインフルエンザなどと同じ従来型の不活化ワクチン、新たなレプリコンワクチン。この5つから希望のワクチンが打てる仕組みになっている。“新しいワクチンだけになってしまうのではないか”という誤解があるようだが、これなら打ってもいいというワクチンを打っていただくことができるので、ぜひそういったことを伝えていただきたい」と注文をつけた。

会見では、疾病対策担当の鳥居明理事が「新型コロナウイルスはもう怖くないんじゃないかと言われるが、決してそうではなく重症化している方がたくさんいる。ワクチンで防げる病気はワクチンで防ぎましょうというのが感染症の常識。新型コロナワクチン接種の目的は全部は難しいが感染を予防する、明らかに重症化を予防する、後遺症が予防されると言われている。特に高齢者や基礎疾患を有する人は、重症化を予防するためにもぜひワク

チンを打っていただきたい」。



同じく疾病対策担当の川上一恵理事は、小児の感染症に関連し「新型コロナの患者報告数を見ると、実ほどの年齢層でも患者さんが出ている。世の中の見方として“子どものコロナの症状は軽いんでしょう”と、子どものワクチンについてほとんど語られていないが、2023年の人口動態統計によると1～4歳の死因順位の第5位。新型コロナ小児科学会や小児科医会などもこの死因順位を見て驚いているが、今年度、都内では子どもに対する

コロナワクチンの助成制度を行っているところはないのではないか」といい

「子どもに接種できるワクチンは4月から一時的に発売中止されていて、この秋の接種分が来週あたりから販売開始される。1人の接種費用は大人と同じおよそ1万5000円～2万円前後になるが、ワクチンバイアル1本を1人のために開けると医療機関は赤字になるし、保護者の負担を考えると1万5000円のワクチンを2回接種できるのか。1～4歳の死因の5位になるくらい、重い病気であるという認識が皆さんの中から消えている点が非常に危惧される」などと危機感を募らせた。